

集団移転地における水没集落のコミュニティ再編 —丹生川ダム・旧五味原集落を事例に—

人文地理学研究室 4年

11910156 森 菜々子

はじめに

ダム建設と水没集落をめぐっては、

①経済的な問題に関する研究（補償・生活再建）

池谷（1984）

補償金を求めて集落内の常識が崩れ、水没前に集落が崩壊状態となった。

②移転に関する研究

西野（1981）

個別移転・集団移転のどちらを選択するかには、移転前の集落の性格が関係すると考察した。

→ 移転前の地域との繋がりについては触れられていない

はじめに

矢ヶ崎(2019) の事例

東日本大震災で被災した集落の再編において

人口減少が著しい集落では、転出者が自治会組織や行事に参加できる賛助会が整備。

参加者の確保および転出者と集落の関係維持に貢献している。

はじめに

水没移転には、ダム建設をめぐる地域内の対立や補償金の支払い、代替地の提供など特有の要素があり、矢ヶ崎(2019)に見られるような仕組みが成立するとは言い切れない。

〈研究目的〉

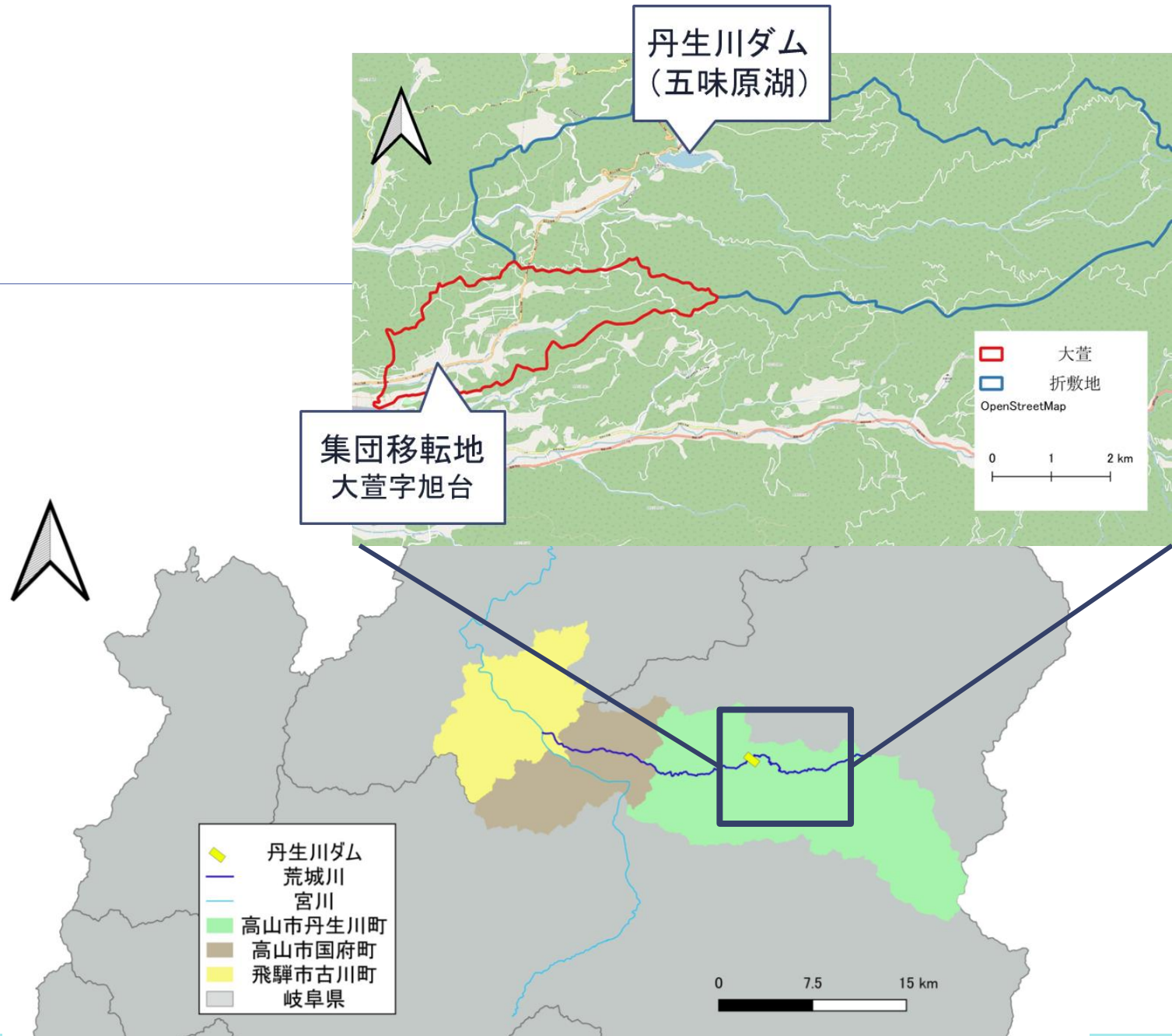
ダム建設に伴って移転した集落におけるコミュニティの再編について検討する。

調査概要

高山市丹生川町 旧五味原集落

丹生川町折敷地の東部にあった集落
現在はダム湖にその名を残す

丹生川ダム建設に伴い、16戸全戸が移転
うち14戸は大萱に集団移転
現在の大萱5組(移転当時は6組)



(図1) 対象地域地図

調査概要

資料調査

- 当時の資料
 - 新聞記事
 - 工事誌等の出版物
- 移転前の集落の様子 および
ダム建設の経緯について調べる

聞き取り調査

- 移転者 1名
 - 元岐阜県職員 1名
- 移転後の生活や経験について
聞き取りを行う

丹生川ダム建設に至る経緯

(表1) 丹生川ダム建設までの流れ (荒城ダム対策協議会綴より作成)

年月	主なできごと
1974年	7月 予備調査の実施
	12月 1級河川荒城川治水事業促進期成同盟発足
1975年	2月 ダム建設計画反対署名簿提出 (折敷地区長ほか73名)
	10月 ダム建設計画即時撤回、事前調査絶対反対署名簿提出 (折敷地区長ほか70名)
1976年	8月 覚書交付
1978年	5月 荒城ダム調査建設反対期成同盟結成主書提出 (五味原43名)
	6月 確約書交付
1982年	3月 荒城川防災ダム建設反対期成同盟会より陳情書提出 (地元16名)
	9月 地元交渉の失敗
1985年	4月 先進ダム建設地視察
	10月 丹生川ダム立入調査協定書調印
1992年	10月 丹生川ダム補償基準調印式
1994年	3月 住民の集団移転完了
2012年	5月 丹生川ダム完成

住民の反対は根強く、

調査の承諾に11年、
補償基準の調印に18年の
年月を要した。

移転後の集落の姿

(表2) 移転前後の集落の生活圈

(聞き取り調査 より作成)

	移転前	移転後
所属	折敷地	大萱
農地	五味原	大萱
通学先	荒城小学校 (折敷地)	丹生川小学校 (町方)
買い物	高山市内	高山市内
祭礼	独自 + 折敷地	独自 + 大萱

移転して間もなくA氏が大萱全体の町内会長を務めることに

→ 移転直後から大萱の住民として生活

移転後の集落の姿

元来五味原集落には2つの神社があり、五味原獅子という独自の獅子舞を持っていた。

春日神社 → お社を移転。その後大萱の神社に合祀

稲荷神社 → 鳥居を移転。

現在も大萱の神社の祭礼で五味原獅子が披露される。

(表2) 五味原集落の移転前後の祭礼

(聞き取り調査より作成)

	移転前		移転後	
	開催日	参加者	開催日	参加者
春日神社祭礼	合祀先例祭と別日	五味原住民	合祀先例祭の前日(9月13日)	元五味原住民
合祀先神社の例祭	9月23日	折敷地住民と共同	9月14日	大萱住民と共同
稲荷祭	4月5日	五味原住民	4月第1日曜	元五味原住民

移転後の集落の姿

五味原では、長年豊富な木材を活かした炭焼きが行われており、移転直前まで炭焼きを行っていた住民もいた。

移転に伴って窯を失った住民のため、五味原出身の青年らが中心となって愛好会「お・かま倶楽部」を結成。
団地に炭焼き小屋と窯を造った。

→ 五味原の文化を維持するために活動

移転後の集落の姿

折敷地地区とは移転時に別れ

五味原住民から『要望書』を提出し、神社の分社、氏子からの離脱、組合金の返還等を行った。

その後は折敷地の祭礼等地域活動への参加はない

元の地区との繋がりは失われている。

→ 代替地の提供をめぐって仲違いをしたことがきっかけ

移転後の新生活に妬みを持たれることもあった

折敷地地区の祭礼は規模を維持できなくなり、年々縮小。2021年に降格した。

A氏は移転後も折敷地に山を持ち、週に数回通うが、地域活動には参加しない。

考察

- ・ 五味原出身者でのまとまりの維持

+

大萱地区への同化

- ・ 元の地区との関係性の希薄化

矢ヶ崎(2019)のような、元の地区に残った住民と転出者を繋ぐ仕組みはみられなかった。

→ 折敷地地区の祭礼の規模縮小にも繋がる

ダム建設時特有の問題

おわりに

今回事例として取り上げた集落は、移転先の地区に同化し、移転先の一員として生活を送っていた。

16世帯のうち14世帯が集団移転を行ったことにより、移転前の集落で築かれたコミュニティや文化も維持された。

一方で、移転前に所属していた地区との関係性は断絶している。

背景には、移転先をめぐる対立という水没移転に特有の問題があり、移転に伴って物理的な距離が開いただけでなく、地域間の繋がり自体が切れてしまった状態と見ることができる。

参考文献・資料

池谷和信 1984. ダム建設により水没予定にある集落の変貌—新潟県三面におけるゼンマイ採集に注目して. 東北地理 36-2 91-104.

金井利之 2013. 集団移転と住民意思反映. 都市とガバナンス Vol.19.

岐阜県 2014. 『丹生川ダム工事誌』

木本一宏、赤澤宏樹、嶽山洋志、中瀬勲 2010. 和歌山県旧大塔村の集落移転の検証. 環境情報科学論文集 24

西野寿彰 1981. ダム建設にともなう水没村落の移転形態と村落構造—奈良県十津川村迫部落と福井県今庄町広野二ツ屋部落の場合—. 人文地理 33 289-312.

丹生川村史編集委員会 2000. 『丹生川村史 通史編二』

丹生川村役場 『丹生川ダム水源地域整備計画』

矢ヶ崎太洋 2019. 東日本大震災後の人口減少と地域社会の再編—宮城県気仙沼市浦島地区の津波災害とレジリエンス—

参考文献・資料

朝日新聞「ダムできても炭焼き存続 岐阜県丹生川村、移転先で愛好会【名古屋】」1995年12月24日

岐阜新聞「丹生川ダム建設「補償基準」で調印」1992年10月28日

中日新聞「「丹生川ダム」建設、暗礁に」1982年9月22日

『荒城ダム対策協議会綴』